「あともうひとつ」

後藤高志

主人公の「私」は妻と二人で河の近くに住んでいる。妻とは結婚して八年となる。
ある夜の夕食どき、妻は主人公に言った。わたしもう、あなたを愛していないねん。
「これから先も、愛することはないと思うねん。愛していないあなたと、ここで暮らし続けようと思うねん。外から見たら、なんも変わらへん、そんな風に」
理解できない主人公に妻は続ける。「愛してへんだけで、憎いわけやない。どっちでもない気持ちがなんかもうひとつあって……」
主人公は気づいた。妻はなにも変わっていない。ただ、私を愛さなくなっただけだと。
そうして妻に愛されなくなった主人公の生活が始まる。
これまでと同じように小さな印刷会社の営業として働いた。主人公は、紙に色を乗せるこの仕事が好きだ。シアン、マゼンタ。色はいくつかの数値だ。数値と色、そしてもうひとつ、色は記憶だと主人公は思っている。
主人公と妻は、かつて不妊治療に通っていた。しかし思いがかなわぬまま時間が過ぎ、治療を続けることはやめようと二人で決めた。そうして二人は河を歩く。ざざざざと、絶え間なく流れていく水音がする。二人は固まった感情を少しずつ削り、河に流していく。それでもどうしても残るものがある。それでいい、と主人公は思う。二人はその時、やるべきことをしたのだ。
妻はクリーニング店の受付で働いている。近頃は同僚の女性と、その母親と、よくドライブに出かけるようになった。妻と彼女は歴史が好きだから、歴史に関する場所を巡るという。主人公は、妻がその女性を好きなのだと思う。
クリーニング店を訪れた主人公は、妻が、同僚女性に片思いをしていることがわかる。店からの帰り道、主人公はほっとしていた。そしてそんな自分がとても卑怯だとも思う。そして妻も卑怯だと。自分たちは卑怯でさみしい二人組だ。そんな二人で暮らしている。
ある休日に、友人夫婦が二人の家に遊びに来た。夫婦には祥太という三歳の息子がいる。祥太はほとんど喋らず、こだわりの強い子だ。皆で河川敷に散歩に行くと、祥太は突然走り出す。主人公たちは慌てて追いかけた。立ち止まった祥太は垣根の脇に座り込む。そこに座ってある草を一心に見た。細い猫じゃらしのような草だ。じっと見つめ動こうとしない。抱き上げても抜け出して、ついには泣き出してしまう。
この草なのだと主人公は思う。この一見どこにでもある草が、祥太にとってはただひとつの草なのだ。主人公は土を掘り、草をビニール袋に入れて持って帰る。空いている植木鉢に土ごと移して、ベランダに置いた。
持って帰った草はすぐに枯れたが、何日か後、妻がその鉢に小さな葉が生えていることに気づく。クローバーのような形の葉。しかしクローバーには葉がひとつ足りず、色も薄い。シアンとマゼンタをもっと。
主人公はその草を育てる。夏になり、草はどんどん伸びていく。妻と同僚女性はたくさんのところに出かけていく。歴史が関係あってもなくっても。草には赤い花が咲く。これ、ホウセンカやね、と妻は気づく。
雨が降り始めた。もしこの雨が降り続き、神話以来の大洪水になったら。主人公は思う。

その時、この部屋が方舟のように残っていたならば、水の引いた地面にこのホウセンカを植えよう。新しい世界にホウセンカをつなげよう。そして人類のことは、他の生き残った人たちに任せよう。

雨がやんだ。妻の同僚女性とその母親が、初めて部屋を訪れる。主人公は二人を迎えに向かった。

（了）